

二〇二四年度

第一回

# 国語入試問題

帝京高等学校

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

※特に指示がない限り、句読点も一字に数えなさい。

【一】 次の文を読み、後の問に答えなさい。

「あらすじ」

真柴翔は、九月下旬のある日誕生日を迎えて、十六歳となった。日頃からクラスメイトの早見麻優まゆに思いを寄せている。舞台は、翔の誕生日へと日付が変わる夜中、公園での出来事である。

スマホを取り出し、SNSのアイコンに映る私服姿の早見、を食い入るように見た。毎夜欠かさない日課だ。

明日は席替え。

いつまでも天あまの邪鬼じやくではいられない。消しゴムを拾ってもらったあの時、「ありがとう」を素直に言えなかった。からかい合いでしかまともなコミュニケーションを取れず、不甲斐ない自分。でも明日は違うのだ。違う俺なのだ。大丈夫。

声に出して言ってみる。好きです、俺と付き合ってください。好きです、俺と付き合ってください。どうにもサマにならず、声変わりを卒業したばかりの青いセaイタイを呪った。それでも言い続ける。部活と同じだ。練習の積み重ねが結果に大きく響くのだ。「好きで」

「なにやってんの？」

ブランコのギーコギーコ、という音と共に子供のよな笑い声が届いた。俺は驚きすぐに振り向く。

なんとなく耳に馴染みがあるが、誰だろう、

「私だよ、\*モルヒネ」

あっけらかんとした笑顔がそこにはあった。度肝②を抜かれた俺の様子が相当面白かったらしく、モルヒネは「ちょっと、間抜けすぎ」と途切れ途切れに言いながら、腹を抱えて笑いだした。俺はだんだん恥ずかしくなる。さっきの予行演習も、見られていたのか。

「お前、一丁目に住んだの」

しばらくしてから遮るように言うと、徐々に笑いが鎮まってく。そうだよー、と言いながらゆっくりあいつは地面に立った。ジャリ、と砂が擦れる。取り残されたブランコの軋み方は素直で、モルヒネの動きをぎこちなくコピーしていた。赤い座面が振り子のように揺れる。

「一丁目からうちの高校来てんの珍しいよね。近所住まいのクラスメイト発見したの、初めてかも」

それな、と返しながらも、俺は少しトマドゥ。まさしく猫の額ほどの広さしかないこの公園は、少し道を外れた場所に位置していた。近所にはコンビニと住宅、たまに畑があるのみ。どう頑張っても深夜帯に寄るのは安全ではない。こいつは何をしに来たのだろう。

「てか真柴こんな所で何してんの、危なくない？そうそう、痴漢とかって若い男子も狙われるからね。油断しない方が良いでしょう、今何時」

俺の腕時計に急に目を近づけたモルヒネを見ながら、確かに俺も人の事は言えないな、と思いつつ直す。チーズバーガーの温かみが、トートバッグを通して膝にじわりと伝わってきた。こいつがいなくなったら心置きなく食べられるんだけどな。

こいつは男女みんなから「モルヒネ」と呼ばれている。理由はよく知らないが、名前が日根とか比根なのだろうか。だとしても物騒すぎやしないか。それより大きな問題として、モルヒネは早見と仲がいい。俺は脳内にあるモルヒネの情報を片端から並べてみる。こいつは俗に言う「不思議ちゃん」で、女子には愛されているけど大多数の男子には引かれがち。いや、不思議「ちゃん」というよりただの不思議で、そこには可愛らしさのかけらもない。声がデカく、授業中に排水口のようなびきをかく。「数学の単位がやばい」という共通項から親しくなったという男子もときたまいるから、関わってみたら気さくな奴なのかもしれない。もつとも今は、生ハムのパックを手に深夜の公園を徘徊しているが。

「で、なにやってんの？夜空に求愛してたけど。そういうオタク？あの、鉄道オタクが車両に興奮しちゃうとかそういう感じの。空フェチとはなかなか歯ごたえある趣味してんね、それはそれで青春？」

急に馴れ馴れしい。カラミ方をしてくる。しかも口が達者だ。こんな奴に出くわしたのは痛い。明日にでも俺の行いに

尾ひれを付けて拡散するつもりだ。

「お前には関係ねえよ」

( ③ ) (心地で、俺は口を尖らせた。)

「あ、そう。つまんな」

モルヒネの笑みは崩れなかった。掴みどころのない奴って、苦手だ。わずかばかりの沈黙ののちにふと奴が口を開く。

「私さ、さつき十六になったんだよね」

え？と聞き返すと、じゅうろくだって、じゅうろくじゅうろく、と三回繰り返された。

「誕生日前夜って興奮して眠れないんだよ、朝になったらラインめっちゃ来てて、私も一日だけ有名人気分を味わう平凡な大衆の一人になるんだ、とか、お菓子やコスメをくれる、<sup>④</sup>女子力を武装した刺客もいるんだろうな、とか考えるけど、どうしてもその前に自分がご褒美あげたくて」

そう言って生ハムを顔の横にもってくる。ずい、と俺の方へ顔を近づけるこいつの目には、女子特有のこちらを窺うような試すような、小悪魔的作爲が少しも含まれていなかった。俺はほんの少し後ろに下がる。異性だからとか、そんな話した事ないからとか、そういう意識を言動に組み込まず距離を詰めてくるのは、モルヒネだからこそと言える。記憶の限りいつもこんな感じだ。

「深夜に生ハムとか塩分過多だろ」

「いや最初の感想それ？落胆したぞ、もつとなんかあるでしょ」

「うーん、プレゼントあげ合う文化、男にはないから」

俺も今日誕生日なんだよ、とは言わなかった。話題を提供する事で「夜空求愛事件」をうやむやにしても良かったのだ。新しい話を与え、会話を進める事さえ癪に思えた。なんとなくこいつが信用できない。膝で持て余した熱は、だんだん体温に溶け始めていく。もつてのほかだ、という目で俺はトートバッグの隙間を覗いた。もし俺がここでチーズバーガーなんか食いだしたら、終わりだという感じがする。目の前をカクカクした軌跡で蚊が通り過ぎた。

「すぐくない？もう夕方になってもカラオケから締め出される。クツジョクには遭わないんだよ、私」  
十六歳最強か、とつぶやきながら生ハムのパッケージをモルヒネはぺりぺり剥がす。人工的なピンク色の薄いかたまりが、俺からもちらつと見えた。

「正気？素手で食うの？」

「悪い？」

「いや衛生的にどうなんだよ」

「コンビニのトイレでさっき手洗ったから大丈夫」

汚ね、と言いながらも俺は笑った。モルヒネは丸い目を瞬またいてきよんとする。が、すぐに肉をちぎって口に放り込んだ。うまく噛み切れないらしく、眉間にしわを寄せながら長い事顎を動かしている。変な奴。

「お前おもしれーな」

何の他意もない。グラスの外側につく水滴のように、ごく自然な感想だった。

でも瞬間、顔が曇る。

⑤ 「ごめん、その褒め方やめて」

季節の波に残されたセミが一匹だけ、リズムに固執してもがき喚くのが聞こえる。モルヒネは言葉をツギ足した。「今日は大事な日だから、私は私でいるのをお休みするって決めたの、家出る時に。普通であろうってね。だけど今、それは無理だって分かった。私が違うと思っていた私は実の話、本物の私なんだね。それにだんだん意識的な肉付けをして、今の私がいるんだ。肉は癒着※ゆちゃくしてどんどん無意識の動作を実行していく。私はビスケットの方が好きだよ。深夜に生ハムとか塩分過多でしょ。おかしい、それにむくんじゃう。でも買った。なんでだと思う？」

俺はモルヒネの顔を見なかった。何に怒っているのか見当もつかず、怖かった。こいつなら言われ慣れているだろうとも思っていた。だってモルヒネは（A）から。クラスの女子の常套句※じょうとうくでもある。モルヒネ、（A）ね。そう言われたこいつが「私、エンターテイナーだから」と得意げに返していたのを思い出す。

「そっちの方が（ A ）からだよ。稚拙な理由だと思わない？私の中で、食欲よりも面白さの美德が勝っちゃったわけだ。真夜中の公園で女子高生が生ハム食べてたら（ A ）な、つて。無意識にそう思ってた。私は自分を大事にするより先に、他人からの好奇を煽りたかったんだよ。誰に会うかなんて分かんないのに、学校に行くわけでもないのにね。虚しくてたまらないよ」

漏れる 嗚咽を隠すように言葉をハキハキ並べ、モルヒネは泣いていた。俺は呆気にとられつつも言葉を探す。女子を泣かせた事なんてない。だから言うべき事が分からない。

「俺本当に、その、なんというか」

いや、泣いているその理由が掴めない。だから励ます事も出来ない。でも俺の発言が何かしらの トリガーを引いてしまった事は確かだ。

「ごめん」

謝った。

「違う」

否定された。モルヒネはキツと俺を見据え、首を振る。

「真柴は何も悪くないじゃん。これはただの愚痴。私があまりにも私自身にのまれかけたから、つい泣いちゃったの。君は被害者、私が加害者」

だから、とモルヒネは続けた。

「謝るのは私の方だよ。ばったり会っただけのクラスメイトが突然泣き出したりしてごめん。面倒くさくて、ごめん」  
言い終えたモルヒネは堂々としていた。目は少しの赤みも帯びず、ただこちらを見ている。電灯の無機的な光のせいで青みをまとったその姿は、何か底気味悪い印象を放っていた。気圧されつつも俺は聞く。

「なんか嫌な事でもあったのかよ」

「別に」

「なら、いいけど」

全然良くもなければ納得もしていない。でもこれ以上こいつの事情に踏み込むのも野暮※やぼだと思った。

「じゃあね」

あくびをひとつ放ち、モルヒネは路地の方へと歩き出した。影が薄く伸びる。しかし出口のポール付近で立ち止まると、何かを思い出したのかこちらを振り向いた。大きな声を弾ませる。

「告白の練習してたんでしょ！頑張ってるね！知らないけど応援してる！」

マジめっちゃ響いている待ってほんとにやめろ、と俺が慌てるさまを見て、あいつはけらけら笑った。

時計塔は一時を指している。

(新 胡桃『星に帰れよ』河出書房新社)

※(注) 天の邪鬼……何事についても人の言動に逆らう人。

モルヒネ……アヘン含有アルカロイドの一種。強い鎮痛作用を持ち、習慣性の中毒を起しやすい。

常套句……決まり文句。

癒着……離れているべき膜などが炎症のためくっつくこと。

嗚咽……むせび泣くこと。

トリガー……引き金。

野暮……人情の機微や世情に疎いさま。無粋な人。

問1 本文中の傍線部 a～e のカタカナを漢字に直して答えなさい。

「 a セイタイ                      b トマド(う)                      c カラ(み)                      d クツジヨク                      e ツ(ぎ)                      」

問2 本文中にある次の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

「 1 遮(る)                      2 軌跡                      3 眉間                      4 稚拙                      5 愚痴                      」

問3 傍線部①のように真柴翔が考える根拠は何か、説明しなさい。

問4 傍線部②「度肝を抜かれた」の意味としてふさわしいものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア ひどく驚くこと                      イ ひどく恥ずかしかること  
ウ ひどく怒ること                      エ ひどく後悔し、嘆くこと

問5 空欄(                      ③                      )に入る最もふさわしいものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人の口に戸をたてるような  
イ 寝耳に水のような  
ウ 焼け石に水のような  
エ 穴があつたら入りたいような



問 6 傍線部④とはどういうことか、最もふさわしいものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 女子にありがちの、相手に媚びへつらい、うわべだけの態度を見せる友人
- イ 男子なのに、まるで女子のように振る舞い、迫ってくる友人
- ウ 化粧品などを贈り、メイクして、外見を飾ることにこだわりを見せる友人
- エ 女子であることを前面に押し出し、男子の前でか弱く振る舞う友人

問 7 公園で偶然出会ったモルヒネと早く別れたいと思っている翔のイラ立ちの気持ちを象徴した比喩表現を、本文中より三十字以内で抜き出して答えなさい。

問 8 傍線部⑤において、なぜモルヒネはこのように言ったのか。最もふさわしいものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 翔の褒め方に心底怒りを覚えたから
- イ 深夜の自分の行動について、とやかく言われたくなかったから
- ウ 十六歳になった今、もっと違った生き方をしたいと思っていたから
- エ 誕生日の日ぐらい、自分が思う本来の自分の姿でいたいと思ったから

問 9 空欄（ A ）に共通して入ることばを答えなさい。

問 10 モルヒネは、なぜ好きなビスケットではなく、生ハムを選んだのか。その理由を本文中より四十字以内（句読点含む）で答えなさい。

【二】 次の文を読み、後の問に答えなさい。

① 白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり

秋も深まると口をついて出る若山牧水の歌である。人生の山坂を知り抜いた大人が、酒の心得を教え諭すような場面が浮かぶ。

実はこの歌、度を過ぎた深酒で乱れた自分を反省するというガイン<sup>2</sup>がある<sup>2</sup>と知ったのは、<sup>②</sup>俵万智さんの評伝『牧水の恋』を読んだからだ。当時、早稲田大学の文学青年で、恋のもつれから暴飲して線路に寝て電車を止め、お堀に飛び込んで警官に叱<sup>3</sup>られていたという。

恋の相手は小枝子という女性。思いの届かぬ年上の人妻を無垢<sup>\*むく</sup>な白鳥にたとえた。

白鳥は哀しからずや海の青そらのあをにも染まらずだよ

小枝子は2児<sup>4</sup>をコキョウ<sup>4</sup>において上京し、いとこの男性と同居していた。牧水の心は四角関係の荒波で乱れに乱れる。

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君に

願いがかなって小枝子と旅した千葉県海岸の海岸を俵さんは訪ねている。「思いを遂げたというカンゲキ<sup>5</sup>からすばらしい歌がいくつも生まれました」。

破局を迎え、牧水は浴びるほど酒を飲む。

海底に眼なき魚の棲むという ③ 眼の無き魚の恋しかりけり

牧水は ④ まるで深海魚のように沈んだ。初めて教室で習った日、私にはさっぱり理解できなかったこの歌も、5年越しの恋の結末を知ればすんなり納得した。

その後、牧水は家庭を築き、ご承知の通り歌壇に大きな足跡を残す。私の親しんだ牧水の歌の多くは20代前半に詠まれている。 ⑤ 実り多き失恋だった。

〔朝日新聞『天声人語』(21・11・5)掲載〕

※(注) 無垢……けがれなく純真なこと。

問 1 傍線部 1 ～ 5 のカナカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

問 2 傍線部 ①「白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」について

1 枕詞を抜き出さなさい。

2 この句はどのような意味ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その白い歯にすらしみとおるような味わいの秋の酒は心静かに飲んで風情を楽しもうよ。

イ その白い歯にすらしみとおるような味わいの秋の酒は毎日飲むから心が穏やかになるものだよ。

ウ その白い歯にすらしみとおるような味わいの秋の酒は飲めば飲むほど盛り上がるものだよ。

エ その白い歯にすらしみとおるような味わいの秋の酒は酒造職人の心が込められているので美味しいのだよ。

3 次の歌集のうち若山牧水のものには○を違うものには×をつけなさい。

「ア 海の声                   イ 桐の花                   ウ 一握の砂                   エ 別離                   オ みだれ髪」

問 3 傍線部 ② 俵万智さんの代表的な第一歌集名を答えなさい。

問 4

傍線部③「眼の無き魚の恋しかりけり」とは「目のない魚がうらやましいことだ」という意味ですが、牧水はなぜ「目のない魚がうらやしい」と思ったのですか。簡潔に説明しなさい。

問 5

傍線部④「まるで深海魚のように」とありますが、この表現技法を次の中から一つ選び記号で答えなさい。

「ア 隠喩      イ 体言止め      ウ 直喩      エ 倒置法      オ 擬人法」

問 6

傍線部⑤「実り多き失恋」とありますが、なぜ「実り多き失恋」と言えるのですか。簡潔に説明しなさい。

受験番号

氏名

得点

【二】

問 1

a
b
(う)
c
(み)
d
e
(ぎ)

問 2

1
(ろ)
2
3
4
5

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7


問 8

問 9

問 10


【二】の解答欄は裏面にあります



問 1

1
2
3
4
5

問 2

3	2	1
ア		
イ		
ウ		
エ		
オ		

問 3

--

問 4

--

問 5

--

問 6

--

--

受験番号

氏名

得点

【一】 問1

- a 声帯
- b 戸惑 (ご)
- c 絡 (み)
- d 屈辱
- e 継 (ぎ)

問2

- 1 さんぎ (る)
- 2 きせき
- 3 みけん
- 4 ちせつ
- 5 ぐち

問3

誕生日が過ぎ晴れて十六歳となった翔は、十五歳の時より  
 高校生感が増した気がするので、今までの早見との接し方とは  
 違うやり方を決意したから

問4

ア

問5

エ

問6

ウ

問7

膝	で
温	に
持	て
溶	け
余	始
し	め
た	て
熱	い
は	く
、	。
だ	。
ん	。
だ	。
ん	。
体	。

問8

エ

問9

面白い

問10

私	は	自
他	人	か
だ	。	。
分	の	好
を	。	奇
大	。	を
事	。	煽
に	。	り
す	。	た
る	。	か
よ	。	っ
り	。	た
先	。	ん
に	。	。
、	。	。

【二】の解答欄は裏面にあります

【二】 問1

- 1 さと
- 2 含意
- 3 しか
- 4 故郷
- 5 感激

問2

1	白玉の
2	ア
3	ア
	○
	イ
	×
	ウ
	×
	エ
	○
	オ
	×

問3

サラダ記念日

問4

眼がある(見えると)と小枝子の顔ばせが思い浮かんでしまうので、  
 いっそ深海に棲むという眼のない魚になってしまえたらどんなに  
 楽だろうと思ったから。

問5

ウ

問6

失恋という経験からの名作の多くは、20代前半に詠まれ、その後  
 歌壇に大きな足跡を残す歌人となったから